2024年2月18日

# 説教題「父親が行動を起こすとき」ヨハネ福音書４章46～54節

主任牧師　加藤　誠

**「イエスは言われた。『帰りなさい。あなたの息子は生きる。』その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」（ヨハネによる福音書4章50節）**

今日の箇所の中心人物は「王の役人」、社会的地位の高いエリートです。この人はカファルナウムに住んでいました。当時のガリラヤの中心地で、港町として栄えていた町です。その息子が瀕死の病気でした。子どもの死亡率の高い古代においては生まれて一年までが最初の大きな山だったようです。その子の持って生まれた生命力が問われたのです。次の大きな山は７歳まで。一通り感染症にかかる中で生き抜いた子どもが残りました。その段階までに３～４割の子どもが命を落としたようです。この王の役人の息子が何歳だったかはわかりせんが、「子ども」と呼ばれているのでたぶん７歳前だったと思われます。父親は「王の役人」としてのツテをたどって町中の医者に息子を診てもらったことでしょう。しかし病状は一向に回復せず、息子は死にかかっていました。親として深い悲しみに沈み、眠れない夜を過ごしていたことでしょう。

その彼の耳に「イエスという男がエルサレムで多くのしるしを見せて人々を驚かせ、カナの村に帰ってきた」という噂が入ります。しかし同時に「イエスという男は危険だ。エルサレム神殿で大暴れして指導者たちから睨まれている」という評判も入ったはずです。このような時、父親としてどうするのでしょうか。「王の役人」としての体裁を考えるならイエスという男には近づくべきではないでしょう。それは彼の地位を危うくする危険性がありました。けれども父親は危険を承知でカナの村までイエスに会いに行く決心をします。カファルナウムから約 30 キロ。速足でも五、六時間を要する距離です。カナに着いた時にはきっと全身汗だくだったことでしょう。

イエスを見つけた彼は頭を下げて頼みますが、その返事はつれないものでした。王の役人としての立派な身なりも、イエスには何の役にも立たなかったようです。「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と、むしろ父親を冷たく突き放すような言葉で応じます。しかし父親はめげませんでした。さらに頭を下げます。「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と。この二度目の懇願に対する主イエスの答え。それは「帰りなさい。あなたの息子は生きる」でした。

このイエスの言葉をどう受けたらよいのでしょう。自分ならどうするだろうかと思い巡らしました。「帰れって？」「これだけ頭を下げてるのに？」「カネを積めばよいのか？」「王の役人だから嫌われているのか？」。憤り？落胆？絶望？…自分だったら混乱して、ため息が大きすぎて、へなへなと座り込むだろうな…と思いました。それを考えると、この主イエスの言葉に対する父親の行動に驚かされます。「その人

は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った」（50 節）。私には信じがたいことです。父親はイエスを連れて帰り、息子に手を置いて癒してもらうために半日走り続けてきたのです。こんなあっさり引き下がれるものでしょうか。しかし彼はイエスの言葉に従って、カファルナウムの自宅に戻っていったのでした。

それにしてもなぜ父親は簡単に引き下がれたのだろう。さらに思い巡らしました。一つ思い当たったのは「主イエスの言葉とまなざしに力があったから。父親の熱い懇願を上回る主イエスの迫力というか、有無を言わせない力強さがあったのではないか」ということです。「大丈夫だ。父親の君はわたしの言葉を握りしめて、息子のところに帰れ」と。この時、ただちに父親が 100％完全に信じ切れたとは思えませんが、しかし彼はこのイエスの言葉を握りしめて息子のところに帰って行ったのでした。

父親は当然ながらイエスに一緒に来てほしかったのです。しかし、それは「イエスを見て信じる信仰」でした。それに対して主イエスは「見ないで信じる信仰」を求めました。「このわたしを信じなさい！」と迫ったのです。

私たちは「あいつの言うことは信じられない」と言います。普段の言動を見て信用できない人の言葉は額面通り受け止められません。言葉を信用できるかは、その人を信頼できるかどうかにかかっています。父親は初対面のイエスを信じたのでした。この人は信頼できると受け止めた。なぜそんなことができたのか。父親の力というよりも、ただ聖霊の働き、神さまの働きとしか言いようがありません。説明を超えた力、熱い迫りを感じて、この父親はイエスその人を信じたのではないか。イエスこそ神の愛を生きる人、この人の言葉は信じるに足ると。私たちは 100％の完全な信仰を燃えちえないとしても、大切なことは「主イエスその人」を握りしめることなのです。

彼が家に戻る途中に、家の人が来て、彼の息子の病気が良くなって生きていることを告げたのでした。「これはできすぎた話だ」と思われるかもしれません。しかし、ここに一つの真実があります。それは「私たちが神の愛を信じ、握りしめる時、神の愛は私たちの命となる！」ということです。神の愛は見えませんが、神の愛は信じるに足る。イエスが伝えた神の愛はほんものだと受けて、私たちがその愛を握りしめて歩み始めるとき、私たちは神の力に生かされるのです。愛は人を生かす力だからです。

主イエスの「帰りなさい」という言葉は英語訳の聖書で「Go your way ! Your son is living !」とありました。「あなたの道を行きなさい」という言葉です。「大丈夫。神の愛を握りしめて、あなたの道を行きなさい。神の愛はあなたと息子と共にある！」。主イエスを信じ、主イエスの言葉と主イエスその人を握りしめた時、彼は神の力を信じて、「息子と共に歩む父親」とされたのでした。

さて、私たちは何を握りしめてこの世界を生きていきますか。十字架に向かう歩みに神の真実の愛を見せてくださった主イエスの言葉に生かされていきたいのです。